

たんぽぽの目線で

高田 智子 滋賀県東近江市 三十九歳

わが家の部屋のベランダに、たんぽぽが咲いた。小さなコンクリートの割れ目から、そっと世界をのぞくように、遠慮がちに花をつけている。それを娘が知らせてくれた。以来、娘や犬と散歩するとき、気をつけて見ていると、アスファルトの道端でも、けなげに咲いている。娘や犬と散歩すると、必然的に歩く速度がゆっくりになる。娘や犬がいなかったら気づけなかった景色かもしれない。

「わーっ、こんなところにも！」

娘と犬と同じ目線に、しゃがみこむ。すると、いつもの見慣れた風景が、ちょっと違って見えてくる。四つ葉のクローバーがかたまつて案外たくさんあること、桜は下から見上げると、ピンクというより白く見えること。

光は、直接手で触れることはできない。風は直接目で見ることはできない。私たちは、何かが輝いたり、揺れたりすることで、光や風を感じる。植物はそれを人に知らせる媒介なのかもしれない。たんぽぽの明るい黄色を見て、春のやわらかい日差しを知る。花卉が繊細にふるえるのを見て、春のやさしいそよ風を感じる。

ちよっと立ち止まってしゃがんでいるその時間は、たんぽぽが私にくれた、ささやかなゆとりのように感じられた。たんぽぽが世界を見ている高さになって、世界を見てみよう。